
片腕の王女

赤屋根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片腕の王女

【Nコード】

N 8 7 6 9 M

【作者名】

赤屋根

【あらすじ】

広大な宇宙が物語の舞台。ある文明で、人間は船を乗りこなし、様々な惑星を生活の拠点としていた。

惑星アセチルのスパイであるアダムとナロンは、ひよんな事から監獄の星テストロンで、脱獄したあどけなさの残る少女を拾う。

素性を空かさない入れ墨だらけの少女と出会った事で、二人は陰謀に巻き込まれてゆく。

不気味な少女（前書き）

遠い宇宙、ある文明でのお話。

不気味な少女

煙がたちこめる店の中、ネオンライトの影に隠れる様に店の一番すみで麻薬を吸っている少女がいた。短い黒髪が店の熱気のせいで顔に張り付いている。彼女は他の客のように高揚^{ハイ}になる事を望んでいないように見えた。何かに悲しんでいるようにも見えなかった。ただけだるそうに、苦しそうに一人で何時間も同じ場所で薬を吸っていた。

「見てみるよ、あいつ」

不思議ななまりで話す、顔中に銀の小片を埋め込んだ異様な顔立ちの男が言った。

「一緒に遊んでやるウゼ」

顔中銀だらけの男は、横にいた緑がかった皮膚をした男に話しかけた。緑がかった皮膚をした男は、音楽の爆音にあわせて激しく体を動かし、まるで聞こえていないような素振りだったが、一瞬少女の方に目を向けた。少女の姿を鈍くなった頭で認識すると、爆音にあわせてリズムをとるのをやめないまま、少女の方に近づいて行った。

間もなく、少女は三人の男に囲まれた。

「おい！楽しもうぜ！」

顔中銀だらけの男が、うつむいたままの少女の腕をつかんで店の中心に無理やり連れて行く。少女がうつむいているのは、怖がって

いるためと判断したようだ。興奮おさまらない男達は、奇声を発しながら手にした酒びんの中身を、少女の体じゅうになみなみとぶちまけた。

少女着きていた、黄ばんで薄汚れたごく薄い生地のマントが、大量の酒をあびて少女の体に張り付く。男たちはますます喜んで奇声をあげる。しかし緑がかった皮膚の男は半透明の布地を通して透ける、少女の刺青に見入られていた。それは少女の体を覆い尽くすほど彫られており、尋常な美しさではなかった。刺青の彫り師である緑がかった皮膚の男は、その少女が自分たちの様な スラムのゴミで大きくなったような 類の人間ではないことを瞬時に悟った。

「よく顔みしてよおじょうちゃん」

顔中銀だらけの男の言葉で、現実に戻された緑の皮膚の男は、ふと視線を感じて、その瞬間背筋に悪寒が走るのを感じた。少女がこちらを見ていた。端正な美しい顔立ちではあったが、心をなくした老婆の様な眼つきが、少女の風貌と異様な違和感をもたらし、なにか恐ろしいのだ。その表情は、不幸、絶望、孤独を顔中に塗りたくった様であった。そう思ったのは緑の皮膚の男だけではない。少女がふらふらと店を出ていく間、顔中銀だらけの男もその場を微動だにもしなかったから。

監獄の星、テストロン（前書き）

まず最初の話の舞台は、監獄の星と呼ばれるテストロン。

監獄の星、テストロン

「久しぶりの惑星はどうだい？アダム。」

「あゝやっぱりこの空気は格別だぜ」

同僚の質問にアダムは答えた。この星、テストロンで？？まれ育ったアダムでさえ、この星の空気は最悪な代物だと言わざるをえなかった。ここに生まれ育った者でなければ、この星で100mと走れる者はまずいない。この星の空気は酸素がとても薄く、有害な成分が盛りだくさん含まれているのだ。その上、人間が不都合なく動ける重力の三倍のそれが、この星には働いている。

それがこの星が、様々な国の囚人の収容を一気に引き受ける事になった最大の理由だった。テストロンは監獄建設が始まるまでは人は住んでいなかったが、天空をゆるがす巨大収容所が多数建設されてからは、必要をせまられて、あるいは自ら進んで人間が移りすむようになり、今ではその人々が一種の社会を形成していた。

アダムと、同僚であり親友のナロンは、生まれも育ちもテストロンだった。テストロンの過酷な環境下で生まれ育った者は、酸素も豊富で環境条件のいい他の国々では動きが優れている。よって軍隊やスパイや賞金稼ぎにスカウトされ、テストロンを出ていく者が多くいるが、アダムもナロンもその口だった。二人はここから遠く離れた惑星の国、アセチルお抱えのスパイだった。

「なにも三年ぶりの休暇が取れたからって、わざわざこんなところまでこなくても来なくてもいいのにねえ」

ナロンがつい愚痴をこぼす。

「まあそう言うな。だれだって故郷は恋しいもんだろ？」

アダムは素知らぬ顔だ。

二人の男はまだ十分に若かったが、その風格は年相応ではなかった。がっしりとした体つきと、それを強調するように体にそった黒のロングコートを着た二人は、郊外のさびれた路地裏を歩いていた。

テストロンは裕福な惑星とは程遠い。裏路地なんかを歩いていると、少し行くごとに乞食に声をかけられる。むろん相手をしていては先に進めないのだが、アダムは路地の真ん中で倒れている少女の前で足を止めた。

「おい、どうかしたか？」

ナロンが怪訝そうな表情で見つめてくる。それには答えず、アダムの意識はまだ少女に集中していた。路地の真ん中に座り、ぐったりしている少女の半身を抱え起こす。アダムは少女の顔を覗き込んだ。まだあどけない。陶器のように白い肌に、無防備な口元。眼には繊細な長いまつげ。道の真ん中だと言うのに安らかな顔で眠っていた。しかし顔を触ると、火のようだ。発熱している。

その様子を見ていた別の乞食の若い女が言い寄ってくる。

「おお旦那様、私めは人でなしの夫に家をおいだされこんな思いをしております、どうか御慈悲を！」

その言葉にはアダムは眉毛一本動かさない。腕の中で眠っていた少女がうつすらと目を開けた。瞳は薄いすみれ色だ。

「また夢の続きだわ」

少女が言う。

「ラリってるのか？おい、どうするんだアダム？」

ナロンが訪ねる。少女は再び瞳を閉じた。

「つれてくよ」

アダムはそう言う。少女を軽々と担ぎあげた。

「つれてつくって病院へか？おい正気か？」

戸惑いを隠せないままナロンは後をついてくる。

「なんか感じねえか？こいつ。」

アダムは今日初めてナロンの目を見て話した。

「厄介事の臭いがするよ」

ナロンが本気で嫌そうなそんな顔をする。

「いい匂いじゃねーか」

そう言ってウィンクするアダムにナロンしげしげと従う。二人の男は路地裏を抜け、区内の中央病院ではなく、普通の人間なら絶対に嫌煙する闇医者の方へ向かった。

闇医者

闇医者は名をオスカーと言った。彼はいくつかの点で普通の医者と異なっていた。第一に、彼は診察室を持たない。彼は診察や治療、手術までもを自分の寝室、リビング、あるいはキッチンで行う。第二に、彼は患者を選ぶ。生きたい、直りたい、と強く思う患者ほどオスカーを本気にさせる事ができた。あるいは単なる気まぐれで彼は患者を選んだ。

少女は狭くて乱雑なリビングの、ソファの上に横たえられていた。アダムとナロンは、物でこった返した――しかしオスカー曰く物が在るべき所に収まっているので汚い印象を与えない――部屋の隙間を探して置かれた椅子に座っていた。オスカーはキッチンで何か作っている。

「そいつは俺の患者じゃねえ」

オスカーが手を休めないまま言った。たんまりとした口ひげで口の動きは分らない。

「そいつの病気はそいつの孤独感や絶望感が引き起こした病気だからな。しかしおまえらの頼みとあっちゃあしょうがねえな」

オスカーはそう言い、手に何やら薄緑色のミルクの入った大きなグラスを持ったままりビングに入ってきた。

少女はもう二日と二晩眠り続けていた。オスカーが少女を軽く揺すりおこす。少女は目を覚ますと、驚くでもなく、目覚め悪そうに半身をを起こした。オスカーが手渡した薄黄緑のミルクを気味悪そうに眺めている。

「飲みたくなかったら飲まなくていいんだぜ」

そうオスカーが言くと、少女はオスカーを探るようにいちべつし、グラスの中身を一口飲んだ。とたんに少女はそれはおいしそうな顔をし、残りを一気に飲み干した。飲み終わると口の回りをぺろっと

なめ、オスカーの方に物欲しそうな視線をちらつと投げかけた。

「それは希望感の満ちるジューズだ。絶望感には旨いもんが一番効くからな。でももうないぜ」

少女はオスカーの最後の言葉に、自分の内心を見透かされた気がして少しばつの悪そうな顔をした。

「名前はなんていう？」

その様子を見ていたアダムが少女に問いかけた。少女はゆつくりとアダムの方を振り向くと、アダムの黒く短い髪、茶色い目、全身黒尽くしの服装を注意深く観察した。そしてゆつくりと口を開いた。

「残念だけと言えないわ。みんなが私をなんて呼んでたかなら教えられるけど」

アダムは手のひらで果物をもてあましている。その沈黙を肯定ととったようだ。少女は高くて柔らかい声でこう告げた。

「イシュレよ」

その時、入り口の戸を乱暴に叩く音が部屋中にとどろいた。

選択

ドアを乱暴に叩く音が部屋中に鳴り響く。

「警察だ！ここに脱獄した鼠がいるって通報があったんだが邪魔するぜ！」

イシュレの体が恐怖で硬直し、見開かれた目はドアに釘付けになる。その様子とは対照的に落ち着き払っているアダムが口を開いた。

「おまえに選択肢はあまりなさそうだな」

アダムはイシュレを正面から見据えた。

ドアが低い男達のかげ声と共に大きく軋む。

オスカーがドアの方に心配そうな視線を投げかける。

その瞬間にドアが爆音と共に吹き飛ぶ。

「土足で邪魔するぜ！」

そう言いながら大股で入ってくる男達は、アダムやナロンと同じ位体格がいい。

「何を言いたいのか？」

イシュレは警察と名乗る男達を横目で見ながらアダムに問いかけた。男達は人間を捕らえるように改良された特殊なロープを肩にかけている。

「あいつらと行くか、俺達と来るかって事さ、囚人さん」

アダムの余裕たつぷりの顔をイシュレはひしと見据える。イシュレを取り囲んだ警察が勝ち誇った笑みを浮かべながらイシュレに向かいロープ投げかける。

「あなた達といくわ」

イシュレは恐怖が声色に出ないように、精一杯の威厳をこめて言った。

「うっ！ギャア！！！」

次の瞬間部屋中に響きわたった悲鳴は、警察の男達のものだった。崩れるようにその場に倒れる三人の男達。

我に返ってイシュレがアダムの方を見ると、アダムは涼しい顔をして使った銃を胸元にしまい終わった後だった。

船

「アダムてめえは医者の家で患者を生み出しやがって！」

「すまねえな、オスカー。この分とドアの分はつけといてくれ」

アダムは倒れている男達を踏まぬよう気をつけながらここを出る支度をする。イシュレはアダムから投げつけられた黒い布を顔と体が隠れるように丁寧に巻き付ける。

「次ここに来るのはまた随分先だろ？」

裏口へ向かう三人にオスカーは問いかける。

「いや、以外とすぐかもしれないぜ」

「あんまり無茶はするなよ、でないともう二度とこの土地を踏めないからな」

「わかってる、色々ありがとうオスカー」

最後にオスカーとアダムは軽くハグをして、三人はオスカーの家を出た。

アダムとナロンが横並びに前を歩き、その後ろをイシュレがついて行く。二人について行くにはイシュレは軽く小走りにならなければいけない。

一人でなくなった事で、イシュレには回りを観察する余裕が生まれていた。石の壁に両側を囲まれた裏路地は人通りが疎らだが、ぼつぼつと路店が開かれ、そこでは日用品が売っている。その売り物の中に白い色をした物は一つもない。イシュレは斜め後ろを振り返り、先端の塔の部分のみが覗いている巨大な牢獄を睨むように見た。真っ白だ。この星では白は囚人の色なのだ。イシュレは数日間白いマントを着たまま動き回っていた自分の浅はかさを悔いた。

「ねえ、なぜ私を助けてくれたの？」

イシュレは前の二人に問いかけた。それに答えたのはアダムだった。
「そうだな、こんなところで話すのもなんだからこの話は船の中ににしようぜ、いつでも飛び立てるし、安全だ」

「船を持っているのね」

イシュレの目はきらきらと輝いた。

船が着けてあるのは郊外を出た所の草原だった。草原といっても、生えているのは肌を傷付けそうなほど堅くて鈍い色をした植物だ。郊外に近いからか、十機ほど船がとまっている。その中の、比較的大きくて平べったい半円形をした船の前で三人は足を止めた。

アダムとナロンが船に近付くとスロープが降りてくる。二人に続きスロープに乗ると、船の重力制御装置のおかげでイシュレは急に体が軽くなったように感じられた。それと同時にこの星に来た当初重力が強すぎて歩くこともままならなかった事が思い出された。

スロープが上がるとドアは閉じられ、静寂に包まれた船内にイシュレ、アダム、ナロンの三人だけとなった。

取引

イシュレは薄暗い閉鎖空間に素性を知らない二人の男という事にかすかな恐怖を感じたが、すぐに好奇心が勝り周囲を観察し始めた。船内はあまり広くないが、いくつかのドアが存在する。今入ってきたドアが一番大きく、奥の壁には細いドアが四つ、その他にも一人通れる程のほぼ正方形のドアが三つ存在する。金属張りの壁や床は光沢がなく少し古い感じで、全体的にとってもシンプルだ。操縦桿と今いる部屋は、少しだけ白く色付く透明な壁で仕切られている。

周囲の様子を一通り観察すると、イシュレは本題を切り出した。

「もう一度聞いわ、なぜ私を助けたの？」

ナロンは自分には関係ないという風に、壁に備え付けのベンチのような物に腰を下ろした。

アダムは壁に寄りかかり、床の一点を見つめたまま口を開いた。

「あの監獄からそのか細い体でどうやって脱獄したかを教えてくれたら飯はちらにしていやるぜ」

イシュレは暫く思考を巡らせた。そしてゆっくりと慎重にきりだす。

「それはできないわ」

「おい感謝の気持ちは?!」

声を荒げたのはナロンだった。アダムはそれを遮るように続ける。

「理由は？」

「私を故郷ミスカルまで連れて行ってほしいの。ここには生きるも死ぬも同じ事だわ。もちろん連れて行ってくれたらすべてを話すし、出来る限りのお礼をするつもりよ」

イシュレはそこまでを一気に言った。

「解った」

「おい正気かよーアダム」

ナロンはもはや呆れている。

「その代わり連れて行った後で話さなかったり、話した情報が使えない物だったりしたら、今ここで船を下りなかった事を後悔するぜ」
イシユレはアダムに睨まれて後ずさりしそうになるのを堪えながら、
頷いた。

飛行先

話の展開にナロンが小さなため息をつく。

「その情報が欲しいのは分かるが、仕事に私情を挟むような事はするなよ」

「そうだな、だがあいにく今は休暇中だ。おまえはここに残って休暇を満喫してくれもいいぜ。」

アダムは操縦席へと歩み寄る。操縦席と、今いた船内を隔てる半透明な壁を、そこに壁が存在しないかのように通り抜けた。

「この船は俺の船でもあるんだ。おまえ一人に任せておけるかよ」
そう言い、ナロンもアダムに続き壁を通り抜ける。

操縦席に座った二人は、手早く離陸の準備を進めて行く。操縦桿はシンプルで美しい。パネルの数は多いものの、スイッチの類は数十個程度、レバーは十個もなく、音声操作に頼る所が大きいようだ。エンジンが急激に暖まる音がし、安全ベルトがするすると自動で装着される。イシュレは半透明な壁に触れてみた。どうやらイシュレは通り抜けられないらしい。暫く不思議そうに透明な壁に触れたり、拳で軽く叩いたりしていた。

「やめろ」

アダムの戒めの言葉が飛んできて、その直後に船はテストロンを離れた。

「ベンチに座ってベルトを締めとけ、少し揺れるかもしれない」

アダムの言葉通り船はほんの少しだけゆれ、テストロンの淀んだ空へと消えていった。

船が宇宙空間へ達し、飛行パターンが自動光速飛行へ切り替わった頃、イシュレが独り言のようにつぶやいた。

「この船にシャワー室はあるのかしら」

「一番奥の細長いドアだ」

とアダム。

「入るのか？」

とナロン。

「図々しいのは承知だけど、どうしても今すぐに入りたいの。使ってもいいかしら」

その言葉も質問という感じより独り言という感じた。その証拠に二人が何も言わずともイシユレはシャワー室へ入ってゆく。

背後でシャワー室のドアが閉じられ、船内が再び静寂につつまれた時、アダムが切り出した。

「ナロン、悪いな。せつかくの休みだったのに俺が全部潰しちまった」

ナロンが少し驚いてアダムを見る。アダムはパネルを見つめたままだ。

「いいんだよ、おまえにとっては重要な事だし。それに特にしたい事もなかったし。」

「そうか、ならよかった」

アダムはやけにあっさりと言って操縦席を立つ。ナロンはアダムを数秒間睨むように見つめた後、パネルに向き直る。

「・・・アダム」

「どうした？」

「前言撤回だ、ミスカバルへの飛行は中止しよう」

ナロンがパネルを見つめたまま発するその口調からは緊張感が伝わる。

「ボスからが指令が来てる」

秘密の会話

ナロンは直ちに進路の変更作業に取りかかる。

「ナロン、任務内容を教えてくれ」

「救出任務だ。ナクとスクレが拘束されたらしい。場所はテストロンの近くのヘスパスって惑星だ。楽な任務ではないな」

ナロンは進路変更を終えると、シャワー室のドアの非常用ロックを掛けた。

「彼女をどうするか考えなくちゃいけい。結論が出るまでドアはロックしよう。聞かれたら困るからな」

そう言つてナロンはアダムの方に向き直つた。

「任務には邪魔だな」

アダムは認める。

「色々知られると都合が悪い」とナロン。

「ヘスパスの、任務地とは遠い場所で下ろすのが一番だろう」とナロンは続けた。

「ヘスパスは原始的な惑星じゃねえの？都市はないだろ」

「アダム、これは任務に関わる問題だ。大事なのは彼女でも彼女の持つ情報でもなく、ベストな状態で任務を遂行できるようにする事だ」

こういう時にナロンの瞳に迷いはない。

アダムは諦めた顔をして肩をすくめた。解つたよ好きにしろ、これがそういうサインである事をナロンはよく知っている。

「そう言えばさっきドアを叩く音がしてなかったか？ナロンもいないだろ、ドアを開けてやれ。酸欠になっちまう」

「ああ、そつだよな」

ナロンはそう言いながらドアのロック解除を行った。
しかし暫くしてもイシュレは出てこない。

アダムはシャワー室のドアを開けてみる。

イシュレは震えていた。ドアの前で、自分の体を両手で守るようにしてしゃがみこんでいる。髪や肌は濡れたままだ。その目はアダムを捕らえた瞬間、彼を鋭く睨んだ。

激しい敵意と深い怯えが混在するその瞳を、まるで深手を負った獣のようだ、とアダムは思った。

「悪かったな、仕事の話をするのに必要だったんだ」

まだ震えの治まらないイシュレに、アダムは手を差し伸べようとようつとしてやめた。

「閉じこめられたわ」

「閉所恐怖症か」

その質問には答えず、イシュレはふらふらと立ち上がる。

「あなた達の話してた事、わかるわ」

取引の難行

その言葉にアダムもナロンも一瞬固まったが、こういう時にアダムは気を取り直すのが早い。

「どんな話も聞こえねえよ、この船はそんなやわな作りじゃないかな」

「でもその証拠に船の進路が変わっているわ」

「おまえはこの船をなにも知らないのに知ったような口を聞くな」

「だって分かるもの。私が邪魔になったのね。私から情報を聞き出すのを諦めて、私を知らない土地に置き去りにするつもりなのね」

イシュレのあまりの的確さに、アダムは一瞬なぜイシュレがそのような結論に達したのかを考えた。しかしナロンのは別の事を考えたようだ。

「物分かりがよくて結構。という事で君には降りてもらおうよ」

「あなた達の邪魔はしない、用事が終わるまで船の中で待ってるわ」

「アダムにさえ預けられないこの船を、素性も知らない他人に任せられる訳ないだろ。」

「だったら用事が終わるまで船の外で待ってるわ」

「らちがあかないな、いいか俺達はいいい人じゃないんだ。諦めろ」

ナロンの有無を言わせぬ口調にイシュレは押し黙る。すぐるような目でアダムを見つめるが、アダムも黙って首を横に振る。イシュレの顔にみるみる諦めと落胆の色が広がっていくのを見て、アダムは少し不憫に思った。脱獄した方法を聞き出すのは無理かもしれない、そう思うとアダムの心も少し沈んだ。

「アダム、詳しい情報が入ってきてる」

ナロンの言葉でアダムの表情は引きしまる。

「ヘスペスの大気圏まではどれくらいだ？」

「四時間はかからないな」

「じゃあそれまでに作戦を練ろう」

アダムが操縦室に踏み込もうとした時、

「ねえ」

それを遮るようにイシュレが声をあげた。落胆の為か俯いて、今にもその場に座り込みそうだ。

「少しだけ横になりたいの」

「そこにベンチがあるだろう」

ナロンは早く作戦会議を始めたい様子だ。

「体を休められるような場所はないのかしら」

ナロンは勝手にしろ、というジェスチャーをして前に向きなおる。

「休息室はこっちだ」

イシュレは少し元気がでた様子で先にいくアダムについて休息室へと入っていった。

休息室

休息室は薄暗く、壁に彫られた横穴のような造りのベッドが縦に三段並んでいる。他の部屋の造りと違い、壁は金属製ではなく、少し弾力のある白い石のようなもので覆われ、湿度やアロマはリラックスできるように調節されている。

「ここでいいだろ」

アダムはベッドの一番下を指差して言った。

「ありがとう」

イシュレはベッドの端に腰掛け、アダムを見上げて言った。イシュレに見つめられて、この容姿なら人間が住んでいる場所に下ろせば生きてはいけるだろう、アダムはそう思った。苦勞はするかもしれないが。

「どうやって脱獄したかは教えてくれるか？」

アダムの質問に、イシュレは少し考えて答える。

「それはできないわ。私の故郷まで届けてくれるっていう約束だったもの。いつか思い出して、私を下ろした場所にまた戻ってきてくれたら、その時話すわ」

アダムの思ったとおりの返事ではあったが、残念だった。

「そうか」

いつか、そのいつかは来るのだろうか、アダムはぼんやりと考えた。

「ゆっくり休めよ」

そう言いながら、アダムは壁に備えつけられたキャビネットをあさり、武器となりそうな物をすべて回収する。

ひとつおりキャビネットをあさり終わると、その中のひとつの銃をイシュレの方に向ける。

「いいか、くれぐれもない事は考えんな」

ウインクしながらアダムがそう言うと、銃を向けられ一瞬びくりと

したイシュレはほんの少しアダムを睨みつけた。

アダムは休息室を出てナロンの元へ向かう。

「わがままお姫様はお眠りになりましたか？」

ナロンが嫌味っぽく言う。

「ああ。さ、始めようぜ」

アダムは操縦席にどかと座った。

「ナクとスクレは、大型誘拐組織のアジトを調べるといって任務中だったらしい」

指令の詳細を示した立体画像を見ながらナロンが言う。

「そのアジトには、誘拐された人達が一箇所に集められているようだ。監視はほとんどいないらしい。まあ山の奥に閉じ込められちゃ逃げ場はないからな」

「面白れえな。じゃあナクとスクレは誰に拘束されたんだ？」

「それをさぐれって任務さ」

「知ってるよ」

素知らぬ顔のアダムに、ナロンは訝しげな視線を投げかける。

「まあ、ほとんど俺たちにナクとスクレの二の舞になれって言ってるような任務だけだな。こんな情報じゃ。」

ため息まじりのナロンの意見を、アダムは否定しなかった。

問題の発生

船は順調に飛行し、ヘスパスの大気圏に突入しようとしていた。アダムとナロンは任務地に地形を詳細に調べたり、ナクとスクレに起こった出来事の予想をし、それぞれの場合の作戦を立てたりして時間を過ごしていた。しかしついに話し合う事もなくなり、ここ三十分ほどは緊張感も手伝って二人とも口数が少なくなっていた。

「そろそろ、彼女を下ろす地点に到達するな」

「ああ。ここは俺が見てるからイシュレを連れてきてくれ」

アダムにそう言われ、ナロンは体を拘束しているものを一つずつ外し休息室に向かう。

ナロンが休息室に入り、暫く時間がたった。アダムが二人が休息室から出て来ないのを僅かに不審に思い始めたころ、ナロンの怒声が響いた。

「どうして何も答えない！！俺はこういう事態を恐れてたのに！！」その直後に、ナロンが何処かを蹴ったのだろう、ドオンという音がアダムの耳まで響いてくる。

アダムは、目は様々なパネルに向けながら、ナロンが来るのを待った。

「アダム、後はお前がしてくれ、お前のほうが優しいからな」

そう言いながら、ナロンは怒り収まらない様子で休息室から出てくる。

「何があった？」

「見たら分かるさ。彼女の身に付けてるものや体以外、俺は休息室の隅々まで隈なく調べた」

ナロンが操縦席にしっかり座ったのを確認すると、アダムはベルトを外した。ナロンの肩を励ますように一つ叩いた後、足早に休息室

へと向かう。

イシュレは、休息室のベットとは反対側にある細い柱と、自分の左手首を手錠で繋いでいた。部屋の隅で、頭を立て膝に埋めて、右手で頭を抱えるように小さくなっている。手首と柱を繋いでいるのが最新式の手錠である事がアダムを憂鬱にさせた。キャビネットに小さいカードキーが三枚入っていたはずだ。アダムはイシュレの前にしゃがんだ。

「お前、テストロンの監獄にいたんだったら逆らわない方がいい相手位分かるだろ。キーはどうした？」

イシュレはそうしている事が最善と考えているかのように微動だにしない。

「その手錠はな、キーがない限り絶対に開かねえんだ。鍵がないと腕吹き飛ばさねえ限りその柱からは離れらんねえぞ。鍵はどうした？それともずっとそこに繋がって俺らのペットになりてえか？」

アダムはイシュレの髪をつかみ無理やり顔を上げさせる。語尾の最後はかなり荒くなっていた。イシュレが微かに首を横に振る動きがアダムの手を通して伝わってくる。イシュレは焦点の定まらない怯えた目をしている。

「いいか、お前の為に最後のチャンスをやろ。鍵を出せ」

それでもイシュレが口を開かない事が分かると、アダムは最後の手段に出た。

アダムが力づくでイシュレの服や体を調べようとしている事を知ると、イシュレは精一杯後ずさりし、それまでにない抵抗を示した。それでも太刀打ち出来ない事を知ると、震えた声で何か呟いた。

「え？はつきり言え」

イシュレはもう一度呟く

「あ？トイレ？流した？」

イシュレは怯えた目でアダムを見上げたが、アダムの険しい目つきを見てさらに怯える。

アダムは内心悪態をついた。もしそれが本当ならキーはばらばらになっ
ていてもう使い物にならないはずだ。そうすると本当に手錠を
解除する手段はない。

「それを信じる証拠はあるか？」

イシュレは怯えと警戒と敵意のこもった目で振るえながらアダムを
見上げる。

「お前が信用できねえってのはもう分かってるからな」

イシュレは右手で自分を守るように、精一杯小さくなった。

予感

操縦桿に戻ってきたアダムは、乱暴に椅子に座った。アダムの固い表情を見て、ナロンは心配そうに声をかける。

「どうだ？」

「つながったまんま。キーはない」

「ちゃんと調べたか？」

「ああ、ぜーんぶ調べたよ。トイレにキーを流したんだってさ。馬鹿な事してくれるぜ」

アダムのその言葉を聴き、ナロンは絶句する。

「じゃあどうするんだよ。これから」

「さあな。とりあえず任務中はいらない事しねえように眠らせとくしかねえな」

ナロンは頭が痛いという風に額に手を置いた。

「俺が片付けて来る。終わったら、任務にすべてを集中しよう。到着まであと四十分だからな」

そう言ってアダムは席を立つと、薬品庫の方へ向かった。

薬品庫の中の暗闇を緑のハンドライトで照らしながら、長期効力型の睡眠薬の小瓶を選び出すと、それと共に注射器を一本手に持ち、休息室へと向かった。

休息室に入ると、イシユレは敵意のこもった目で激しくアダムを睨みつける。

アダムはそれにおかまいなしに小瓶を差し出す。

「飲め。睡眠薬だ。飲まねえなら無理やり注射する」

注射器を見せられて、イシユレはかすかに震える手で小瓶を受けとる。

そして暫くためらった後、一気に飲み干した。

それを見届けると、アダムは少し口調を緩めて言った。

「暫く戻ってこねえから、何も考えず大人しく寝とけよ」

そしてイシュレの頭にぼんと手を置き、ドアの方へと向かった。

イシュレはアダムが休息室から消えるまでずっと、アダムの背に鋭い視線を送り続けた。

「さあ、これで大丈夫だ」

アダムは操縦席に着くと、ナロンの不安そうな表情を横目で見ながら言った。

「何か見落としてる気がするんだよ、アダム。」

ナロンの感がよく当たる事は二人とも身をもって知っている。

「考えすぎさ、色々あって集中しきれてねえんだよ」

アダムはナロンを励ますように言う。

「ま、そう感じるんだったら、いつもより気合入れてこうぜ」

アダムは自分を励ますつもりでこう続けた。

ヘスパス到着まで残り三十分を切っていた。

イシュレ

イシュレは休息室に取り残された。

早く・・・行つて！

消えそうになる意識を繋ぎとめながら、切に願う。

「

」

いつものあれだ。

水が銀の管を打つかのような音が、頭の中で大きく反響する。

「

！

」

音が響いて砕けた後にまた集まり、眠らないで、そう言葉を紡ぎ出した気がした。

くつ、くつ、くつ、と遠くで足音が聞こえる。

重なり合う足音はだんだん遠のいて、突然消える。

もはや本当に二人が船を下りていったか確かめる気力は残されていなかった。

最後の気力を振り絞って、右手の拳をみぞおちに当てて、力の限り突き上げる。

胃の中の物が逆流しそうになるが、なかなか吐くには至らない。

しかしケヴィン・イシュレの育ての親に教わった方法を思い出しながら何回か行くと、何回か目には成功した。

イシュレはそこに小さなカードキーがある事を確認すると、軽くむせ込みながらその場に倒れこんだ。

目を覚ましたのは、それから暫くたった後だった。

まるでそれまで眠っていなかったかのようにすくつと半身を起こす。

細い左腕は柱に繋がったままだ。

柔らかな丸みを帯びた額に髪が一筋かかるのを気にもとめず、高山の小花を思わせるくすんだ青紫の目はくりくりと周囲を警戒する。

やがて人の気配がない事を悟ると、白くて細い指先で小さな鍵^キを拾い上げた。

一分の隙間もなく手首に密着している手錠の細い裂け目に、ためらわず鍵^キを差し込む。

すると手錠は床にぽとりと落ちた。

柱から開放されてゆつくりと立ち上がると、メインルームに続くドアへと向かう。

ドアを細く開き、片目で中を確認してから、歩みを進める。

メインルームには大きさや形状の違う三つのパネルがある。

その中の一番大きい物に近づくとパネルを指先で軽やかに叩いた。

黄色く光輝く文字や図形が空間に浮かび上がり、瞳と肌を照らしあげる。

大きな瞳にうつりこむ文字を必死で解読しようとする、その真剣な表情からは、イシユレの集中力が窺える。

洞窟

ナロンに続き、アダムはスロープを降りる。
両足が惑星へスペースの地面に降り立った瞬間、スロープは音もなく閉じる。

地面というのは正しくはないだろう。

船が着陸したのは切り立った険しい崖の上であり、後方を見上げると、遙か天空にとどきそうな岩の壁がまだ続いているから、巨大で急峰な岩山の中腹に着陸したとも言えよう。

アダムは眩しいかのように目を細めて、眼下の樹海を遠く地平線まで見渡した。

樹海は平坦ではなく、隆起に富んでいる。

天に向かってのびる巨樹を思わせる急峰な岩山が点々と聳え立つ。

灰色の空は厚い雲で覆われている。

湿った生暖かい風に頬をなでられると、なぜか懐かしい気持ちになった。

若草色の中に浮き立つ二人の黒ずくめの男達は一瞬目配せを見ると、情報に^{データ}あつた洞窟の入り口へと草を掻き分けながら進んだ。

岩の割れ目に取り付けられた薄い金属製の扉が、洞窟の入り口のようだ。

アダムがかがんでやっと入れそうなその薄くて小さな扉は、人が近づくとウィーン微かな音と共に開く。

中を覗くと、そこには暗闇が広がっている。四方を岩盤に囲まれ、かなり狭そうだ。

中に人の気配がないか目をこらし、アダムはナロンにそこで待つよう手で^{サイン}合図を送る。

ナロンが銃ビストルを構えたのを横目で確認すると、アダムも銃ビストルを構え、洞窟の中へと入っていく。

中は意外と広い。目が慣れるにつれ、硬い岩だと思っていた壁や地面から疎らに草が生えている事に気付く。

硬いブーツで静かに踏みしめられると、地面はほんの少しだけ沈み込む。

周囲に人の気配、ましてや生き物の気配すらしないのを悟ると、アダムはナロンの名を呼んだ。

二人は洞窟の奥へと歩みを進めてゆく。

奥に進むと、洞窟が少しずつ明るくなってくる。

青白いその光は先陣をきって進むアダムの鋭い眼光を暗闇にゆらゆらと浮かび上がらせる。

まっすぐな洞窟を少しずつ進んでゆくと、突然視界が開けた。

突然の光に目を細める二人が見たものは、類稀なる幻想的な景色だった。

青白く輝き放つ浅い泉。

それを岩のアーチがまたぎ、分断し、洞窟は奥へと連なつてゆく。

青白い輝きの原因は、泉の底を覆い尽くしている宝石だ。

星のように輝き放つ宝石が砂のように一面に敷き詰められ、幻想的で月よりも強い光を放っていた。

周囲に点在している、鮮やかな薄紅色の花をつけた腰丈ほどもある植物は、景色をよりいっそう幻想的なものへとしていた。

銃ビストルを構えたままの二人の汗ばんだ顔に、驚きや感動の表情が浮かぶ。

アダムは泉の側にかがみこむ。

手の甲を守る皮製の手袋が濡れるのもおかまいなしに、泉の底から光る宝石を一つ拾い上げる。

石一つが一つの宇宙であるかのように、星のような輝き・多くの光の点・がそこには閉じ込められている。

その光が、野生的でありながらどこか優しい目を映し出す。

アダムはそれの一つ、胸のポケットにしまった。

ナロンは先程までは泉に見入っていたが、今は薄く雪の結晶が舞い降りたかのような花びらをそつとなでながら、花に見入っていた。その姿を横目で捉え、アダムはふと後ろを振り向く。

その瞬間、背筋にぞわりと冷水のような寒気が走る。

背後には、泉と自分たちを取り囲む形で、巨大な岩の裂け目が口をがぱりと開けていた。

近くに寄ると、その深さは地獄へと続くかのように深い。

落ちた時の事は考えたくもなかった。

今までこれに気付かなかったとは、そう思い心の中で悪態をつく。

「アダム、やばいぞ」

その言葉が、警戒心が体の中で脈打つのに拍車をかける。

「この花、データネットで見覚えがある。危険度SSランクの肉食植物だ。喰らうのは小動物だが、花粉に強力な幻覚作用、特に視覚混乱作用があるんだ。動物を自分の方向におびき寄せる為にな」

どくん、と一回耳の奥で鼓動が鳴るのを感じた。
ゆっくりと顔を上げると、元来た洞窟の道がありえない程遠くに小さく見える。

泉の方を振り返ると、妖精のような七色の虫たちが飛び交い、泉は拍動するかのように眩い光を放つ。

「アダム！早くこっちに来い！何してる！！」

突然の悲鳴のような声に、アダムはナロンの方をぱつと振り向く。恐怖で見開かれたナロンの目は、空を捉えている。

そして、銃を構え、^{ビストル}アダムの名を叫びながら、じりじりと泉の方へ後退してゆく。

その様子を見て悟った。

「ナロン！目を閉じろ！」

普段は出す事のない有無を言わせぬ威圧的な声音にナロンは我に返り、目を閉じた。

自分も目を閉じたままアダムは続ける。

「その花の花粉は聴覚や嗅覚も惑わすのか？」

「いや、確か視覚だけだ」

「そうか、俺の声が分かるだろ、声を頼りにこっちまで来い。目は開けるなよ」

ナロンがゆっくりと時間をかけて自分の側にやってきた事を、不気味な静寂に響く音でアダムは知ると、次にどうすべきかを考えた。視覚以外を使つて、元来た道を戻るしかない。

しかし、もし元来た道でない別の道をたどってしまったえば、大変な事になる。

アダムは元来た道を探す為、心して瞳を開く。

しかし次の瞬間には瞳を開いた事を心底後悔する。

そこには深手の傷を負ったたくさんの子供達がひしめいていた。

みな一様に大きく見開かれた目は真っ赤なのに、アダムと目が合うとこっちに歩み寄ろうとしてくる。

それはまさに地獄絵図で、救いようなない光景だった。

しかし衝撃に瞳を閉じ損ねた事が幸運だった。

アダムはかなり上方に、小さな光が一筋入ってきたのを見逃さなかった。

そして光を背景に、短い髪が微かになびいたのだ。

光は一瞬の内に滲んで消えたが、今の状況ではそれに賭けるしかなかった。

「イシュレ！叫べ！」

命の恩人

イシュレは光るパネルを操作する事を、ついにあきらめた。

長い格闘の末理解できたのは、ライトの操作と武器庫のドアの開閉の操作方法くらいだった。

でも武器庫は使えそうね、イシュレはそう思い、武器庫の方へと歩み寄ろうとした。

しかしその途中、操縦桿のフロントガラスから見える、外の景色に目を奪われた。

水が豊かな星なのだろう、隆起に富んだ台地が緑で覆われている。その台地から、地肌をむき出しにした塔のような形の山が、ぽつんぽつん、と天を指しそびえたつ。

イシュレは、木々の中の吹き抜けてきた風の音を、匂いを、想像した。

とたんに、外にたまらなく出てみたくなった。

そう思った瞬間、足はもうドアへと向かっていた。

後ろでドアが閉まるのと同時にスロープが少しずつ下がり始める。

スロープが完全に地面に届く前に、イシュレは地面に飛び降りた。ふさふさとした草がその衝撃を和らげる。

久しぶりの新鮮な空気にイシュレの心は躍っていたが、素早く辺りを見回した。

危険 あの得体のしれない二人の男の姿 がどこにも
ない事を悟ると、イシュレは大きく深呼吸した。

一年ぶりの清らかな空気に、体のなかから浄化されてゆくような感

覚を覚えた。

しっとりと湿気を含んでいる生暖かい風を、イシュレはその場に立ちつくしながら、いつまでもいつまでも味わい続けた。

暫くして、興奮の波が過ぎ去ると、今度は不安の波が押し寄せて来た。

あの二人は後どれ位で帰ってくるのだろうか、それまでに、取引を有利に進める作戦を考えなくては。

それにしても……イシュレは考える。二人はどこに行ったのだろうか。船が着地した場所は、険しい崖か、切り立った岩肌に四方を囲まれている。

後方の岩肌を見やると、地面に近い場所にある鼠色のドアが目につく。

周囲の景色から浮いているそのドアにイシュレは近づいた。

一人が通れる大きさのそのドアに刻んである字を良く見ようと近づいた瞬間、ドアがシューという音を立てて開く。

イシュレは驚いて、反射的に身をのけ反らせた。

中は真っ暗だった。

洞窟だろうか、イシュレは思った。

しかし、かすかな風にのってただようたくさんの人間の匂いを、イシュレは一瞬で捉えていた。

ここにいる事はほぼ間違いなさそうね、そう思い、身のけ反らせた瞬間閉じてしまったドアに再び近づいた。

ドアが開いた瞬間、驚くべき事が起こった。

「イシュレ！叫べ！」

良い耳に、かすかに届いたその声はイシュレを困惑させた。
中を覗きこんだ姿勢で固まったまま、イシュレはどうすべきかを考えた。

今しがた気付いたが、洞窟の中からは動物達の死骸の匂いがする。
声の主はアダムだろうか。

その可能性は高いが、確証は持てなかった。

「

」

再度聞こえた声は、意味をなさなかった。

別の方を向いてしゃべっているのだろうか、反響としてしか捉えられない。

「私はここよ！」

イシュレは反射的に叫んでいた。

それから暫く何も物音がしなかった。

やがて微かな足音が聞こえ始めたころ、遠くでアダムが言った。

「こつちであつてるか？」

「ええ」

イシュレはそう言いながら、微かな後悔の念を感じていた。

まだ取引を有利に進める準備がととのっていない。

しかし、出口に近づいてくる険しいアダムの形相を見て、その思いは消えていった。

二人がいなかったらそもそも船を飛ばせない。

命の恩人？

イシュレの声を頼りに、アダムとナロンはようやく洞窟の出口に辿り着いた。

アダムはまだ歪んでいる視界の中に、訝しげなイシュレの表情を捉えた。

「なんでここにいる？」

洞窟を出たとたんアダムの口をついたその言葉に、イシュレの表情は曇る。

しかし二人とも問い詰める余裕はないようだ。

息は上がり、額には汗の玉が浮き、黒いスーツがいかにも熱そうだなロンは岩肌によりかかるように崩れこみ、アダムも空を仰いで座りこんでいる。

イシュレもいごち悪そうな様子でその場におずおずと座り込む。

アダムは空を仰いだ姿勢のまま、胸のポケットから光る透明な小石を取り出した。

しかし今その小石は手の中で、ただのざらざらとした灰色の石にすぎなかった。

片腕でそれを放り投げると、ひゅっという音とともに小石が崖の下へ消える。

「助かったよ」

ありがとうとは言わないのね、イシュレは心の中でアダムに呟く。

「私はあなた達の命を救った、あなた達は私を故郷まで送り届けてくれる。それ位してくれても罰はあたらないわ」

アダムはまだ虚ろな目のままイシュレの凜とした瞳を見つめる。

後ろのナロンを振り向くと、どうでもよさそうに目を閉ざしたままだ。

「解ったよ、話は後でだ」

「私は安心していいの？してはいけないの？」

イシユレは大きな瞳でアダムの瞳を覗きこんでくる。

その目はあくまで必死だ。

そのまっすぐな瞳を横目で捉えながら、アダムはかすかに縦に首をふる。

イシユレは顔が自然とほころぶのを感じた。

三人は、厚いどんよりとした雲の下、若草の上で、長いこと風にさらされ続けた。

二人の汗が引き、気持が落ち着いたところ、誰ともなく立ち上がり、三人は船へと向った。

イシユレは名残惜しそうに目下の樹海を眺めながら、一番最後にスロープに上がった。

船の中という安心感が、アダムとナロンの頭をより冷静にした。

「パネルが操作されてる」

ナロンが設定をくまなく調べながら言う。

「すげえな」

アダムはナロンの横に立ちパネルを覗きこみながら言う。

パネルは簡単に操作出来ないように、すべて暗号化されているのだ。外部の者が操作しようとする、難解なパズルを解くように難しいはずだ。

イシユレは船に乗り込んで早々、まるで自分の部屋かのように、休息室へと入っていった。

「まずはあの花の正体をあばく事からだ」

ナロンの言葉で、二人は操縦桿の方へと向かう。

花の正体

「データネットに接続する」

そういうとナロンは慣れた手つきで中央のパネルを操作する。

S5ランクの危険植物の画像の中から数個をピックアップすと、

「これだな」

そう言い、鮮やかな色の花卉を持つ花の画像を選び出した。

「だけど真実の姿はこれさ」

パネルのデータと書かれた部位に手をかざすと、グロテスクな茶色い物体の画像にすり替わる。

平べったい球に拳ほどの深い窪みをいくつも持つそれは、花とは言い難い。

「ずいぶんかわいいじゃねえか、この嘘つき花め」

「ああ、とんだ嘘つきさ。問題は花粉がどこから体内に吸収されるかだ」

ナロンは高速でスクロールされる文字にぎっと目を通す。

「呼吸器からだ。皮膚や感覚器からは吸収されない」

「酸素マスクだけで問題ねえな」

「行くのか？」

ナロンはしばしアダムに戸惑うような視線をおくる。

「行かないのか？」

とぼけたようなアダムの表情にナロンは溜息をつく。

「あいつはどうする？」

「洞窟の入り口で待機つてのが適役だな」

そう言い、アダムは必要な物を調達する為に武器庫の方へと歩いていった。

用意にそう時間はかからなかった。

二人は顔の下半分を覆う黒い酸素マスクを装着し、圧縮された酸素の入ったカプセルを首にかけ、服の中にしまう。

「私の分はないのね」

いつの間にか側にきていたイシュレが訪ねるような口調で言う。

「ああ、門番をたのむよ」

そっけなく言うアダムの言葉にイシュレは渋々、という表情で従う。

三人は再びスロープを降りる。

足早に洞窟の入り口へと向かう二人を追うように、イシュレは小走りになる。

ナロンに続いて洞窟の中に入ると、アダムは一度振り向いた。

「そこを動かないでくれ」

緊張感が伝わったのか、イシュレは神妙そうに頷く。

二人が暗闇に同化するまで、イシュレはその場で二人を見送った。

救出

ナクとスクレの救出は順調に進んだ。

二人は念の為目印の細い糸をひきながら、洞窟の奥へと進んでゆく。泉の水が澄んでいる事意外は、先程とはほど遠い光景が目の前に広がる。

膝まで水につかりながら、二人は洞窟の奥を目指した。

アダムとナロンの手には、ナクとスクレの体内に埋め込まれているチップからのデータを受信する“探知機”が握られている。

「近いぞ」

ナロンが小声でそう告げる。

ゆっくりと頷くアダムも、音や振動や匂いで、多くの人間の気配を察知していた。

洞窟の暗闇が薄明かりに染まり、お互いの表情が十分確認出来るようになった頃、狭い通路が途切れ、目の前に巨大な空間が現れる。そこは大きく、そして明るく、天井の高いドームの中にあるようで、とても洞窟の中とは思えない。

アダムとナロンは洞窟の暗がりに身を隠したまま、様子を伺った。

ドームの中には表情が虚ろな何百人という人間がうごめいている。体の力が抜けたようにその場に座り込んでいる人間や、あてもなくふらふらと歩く人間が大半だ。

その人間達は、みな白い簡単な造りの衣服を身に着けており、病人か囚人のように見える。

その中に、宇宙服のような服を着た人間がちらほら見受けられる。

「世話係か？」

ナロンが小声で囁く。

病人の間を縫っててきぱき動き回る姿は、他の病人たちとは一線を画している。

「目立つのは避けよう」

そう言い、ナロンは左手首に巻いてある幅の広い腕輪のボタンを押す。

すると、黒かったスーツが色あせていき、白に変わった。

アダムもそれに習う。

「お前はスクレ、俺はナクだ。ここで落ち合おう。穏便にな」

「分かっている。先に行く」

そう言いナロンは何気なく白い病人の群れに紛れ込んだ。

ナロンの姿が消えると、アダムも群れに紛れ込む。

高い天井に取り付けられているライトの白黄色の光が、白い服を着た人間達の表情を不気味に浮かび上がらせる。

ドームの壁が茶色いのは、先程船で見た植物が壁一面に群生している為である事にアダムは気が付く。

病人のような人間達は、姿勢を低くして探知機でナクを探すアダムの方を、ぼうつと眺めている。

探知機が指し示したとおりの場所にナクはいた。

地面に座り込み、下をむいてぶつぶつと何か呟いている。

アダムは側に駆け寄り、用意してきていた酸素マスクをナクに装着した。

そして、同じく用意してきていたアイマスクも装着する。

「ナク、聞こえるか？」

アダムは耳元で問いかける。

「助けにきたぜ」

ナクはいつのまにかひとりごつのをやめ、下を向いたままかすかに頷いた。

アダムはナクの腕をとり、人の間を縫うように進んでいく。

ナクがおぼつかない足取りでその後が続く。

二人が約束の場所にたどり着いた時、ナロンとスクレはもうそこにいた。

洞窟の物陰にかくれたアダムとナロンが目配せをした瞬間だった。ピーツという警報の音がドームじゅうに響き渡った。

ヘスベス脱出

ドームの中の人間の群れが、いつせいにアダム達のいる洞窟の方を振り向く。

「これか」

アダムはナクの足首で赤く点滅している足輪を引きちぎった。どうやら足輪に逃走防止用のセンサーが仕込まれていたようだ。世話係りの人間たちがやってくるのに備えて、ナクとスクレを洞窟の奥に追いやる。

「どれ位いる？」

アダムがざわつくドームの轟音に負けじと声を張り上げる。

「分からない、とにかく事を大きくしない方がいい」

そう叫ぶナロンに向かい、宇宙服の世話係が銃を構える。

しかし銃を構えたその瞬間は、ナロンの銃が放った的確な一撃を喰らった死の瞬間と同時だった。

「もう手遅れだろ、武器はレーザー銃（ガン）だ、気をつけろ」

「アダム、いい方法がある、援護してくれ」

ナロンはそう言うと、突然銃を頭上前方の岩に向けた。

ナロンの意図を一瞬で汲み取ったアダムは、宇宙服の世話係の相手を一手に引き受ける。

洞窟の入り口を岩を崩落させる事によって塞ごうという作戦は上手くいった。

人が通れるほどの隙間は生じず、しかし容易には動かす事の出来ない大きさの岩が、完璧に道を塞いでいる。

「これで少しは時間が稼げる、急ごう」

すさまじい土埃の中、四人は目印の糸を頼りに出口へと急いだ。

そのころイシュレは一人物思いにふけっていた。

しかし四人が慌しく人工のドアから出てきたので、一定の距離を保ってその様子を見守っている。

「行くぞ」

アダムはイシュレの方に一瞬目配せをしてそう言い、歩みを止めずに船へと向かう。

五人は無事船に乗り込み、アダムとナロンは直ちに離陸の準備にかかった。

船が大気圏を抜け、安全な軌道に乗った頃、ようやく船内のピリピリした空気が和ぐ。

もつとも、ピリピリとした空気を作り出しているのはアダムとナロンの二人なのだ。

ナクはその場にしゃがみこみ、ぼつぼつと独り言を再開していたし、スクレはのろのとまっすぐ突き進んでは壁にぶち当たっている。

イシュレはスクレの異様な行動が気になるのか、不審そうな目ですっと観察している。

「イシュレ、二人の酸素マスクをとってやれ」

アダムのその言葉に、イシュレはしぶしぶと従う。

眉間に少し皺をよせた表情で、二人に近づいていく。

その間に、アダムとナロンは直属のボスと連絡をとる準備を進めた。

一つのやや大きなボタンを押すと、操縦桿の中央に球体が現れた。その現れ方は気体のようで、しかし質感は液体のようで、宙のある場所に止（とど）まっている姿は個体のようでもあった。両手で抱えられる大きさのその球体の色がみるみる変化し、球体の中に肩から上の鮮明な立体像がむすばれる。初めてそれを見た人は、球型の水槽の中に人が閉じ込められているように見えるに違いない。

アダムとナロンは会釈をする。

球の中の人物　-　アダムとナロンを管轄している將軍、ソバジェ　-　も、アダムとナロンに会釈を返す。

白髪混じりの色あせた茶髪を、後ろになでつけている。

目つきは鋭いのだが、ぬくもりのある目の色のせいで、いくらか優しく見える。

「貴重な休暇だったのに、任務を入れてしまつて悪かった」

最初に口を開いたのはソバージェだった。

「ヘスペスの付近にだ誰もおらんくてな。なんせ銀河の端だ」

「かまいませんよ」

アダムのその言葉に、ソバージェはうむ、というような曖昧な返事をする。

乗組員の増えた船

「ナクとスクレの救出は完了しました」

ナロンがソバージェに今までの経緯を大まかに説明すると、ソバージェはそれを硬い表情を崩さないまま聞く。

「しかし問題があります」

その言葉に、ソバージェはナロンの顔に目を向ける。

「ナクとスクレの様子がおかしいんです、何らかの治療が必要と思われるます」

「そのようだな。だが心配ない、症状を改善する特効薬があるんだ。安価な薬だが出回ってはいない。アセチルで治療する必要があるな」

「二人をアセチルまで帰還させます」

「頼んだぞ。ところで…」

ソバージェはアダムとナロンの間から後方に目を凝らす。

「誰かおるな」

ナロンがアダムの方に目を向けたのでアダムが説明する。

「休暇中に船に乗せたんです。故郷に送ってやるつもりでしたが、任務が入ったのでそれができませんでした。今の所任務に支障はきたしていません」

「そうか…」

ソバージェは少し考えるようにしてから続けた。

「何においてもナクとスクレを最優先にしてくれ」

「もちろんです」

アダムは少し頭を下げながら言う。

「二人を頼んだぞ、アセチルの地で会おう、同士よ」

そう言うと、ソバージェの像は水面に細かい波紋が広がるように消える。

アダムとナロンは目の前球が完全に消えるまで頭を下げる姿勢を崩

さなかった。

イシユレはその会話をじつと耳を澄まして聞いていた。

会話を終えると、アダムが操縦室から透き通る壁を抜けて出てくる。アダムはまっすぐスクレの方へと向かうと、意味もなく突き進むスクレの腕をつかんだ。

スクレは小柄だ。背はイシユレよりは高いが、アダムよりは大分低い。

体の線も細く、細い髪もいかにも繊細そうで、一見子供の様にも見える。

そのスクレの腕をとり、アダムは休息室へと向かう。

休息室のベットの中段にスクレを寝かせると、アダムはキャビネットへと催眠薬を取りに行く。

「良くなるのかしら」

開けっ放しの休息室のドアから入ってきたイシユレが、スクレの方に目を向けながら言った。

「ああ。特効薬があるらしい。まずはアセチルに戻るからな」

「いいわ。そんなに急いでる訳ではないの」

アダムがスクレに催眠薬を飲ませるのを眺めながらイシユレは続ける。

「あなた達はアセチルの軍人なのね。仕事内容からすると特殊部隊って感じがしら」

「あんまり詮索するな。でないと別れる時に記憶を一部消す事になる」

「うそよ」

「ほんとさ」

イシュレは不満げな表情でアダムを睨めつける。

「お前はどうかんだ、人の事ばかりで自分の事は話さねえじゃねか。どんな罪でテストロンの監獄にお世話になってた？」

その質問にイシュレはしばし考え込む。

「私はどんな罪も犯してないわ。ある日突然、見知らぬ人間がたくさん家に上がり込んできて、無理矢理連れていかれたのよ」

その答えを聞いて、アダムは面白そうに少し微笑む。

「お前はまだ子供だな、そんな見え透いた嘘をつくようじゃ」

「嘘じゃないわ。信じて欲しいなんて思わないけど」

そう言いながらも悔しそうな表情のイシュレを見て、アダムは笑うのをやめる。

「何も知らねえようだから言うが、テストロンの監獄は死刑囚と終身刑囚の為の終身監獄だ。一回入っちゃったら二度と出てこれねえんだよ。だからテストロンの囚人は救いようのない大悪党って決まってる。もちろん裁判所のお墨付きのな」
そう言うときアダムはドアの方へ向かった。

その背中に向かってイシュレが挑むように問いかける。

「もし本当だったら？」

アダムはドアの所で少しだけ振り向いて言った。

「何か大きな事に巻き込まれてる」

「そうね…」

イシュレが呟いた言葉は誰にも聞こえる事はなかった。

スクレの憂鬱

飛行が自動飛行モードに切り替わってから二日が過ぎていた。

アダムとナロンはその間五時間交代で操縦桿を握り、操縦桿を握ってない間に睡眠をとったり休憩をしたりした。

二人は一番下の段のベットで交互に仮眠をとったが、イシユレは馴れてるから、と言って部屋の隅で毛布にくるまって睡眠をとった。

今、操縦桿はナロンが握っている。イシユレは休息室の椅子に座り、テーブルに突っ伏している。そこへアダムが手に夕食を持って入ってきた。

銀色の真空パックに入ったそれは、イシユレがこの船に乗って唯一口にした食べ物である。

栄養補給のみを目的にしたその甘くなくパサパサした食べ物にイシユレは心底うんざりしていたが、本音が表情に出ないように気をつけながら受け取った。

アダムも細い金属のパイプでできた椅子に粗雑に座り、真空パックの袋を開け始める。

口に詰め込むようにしてアダムがほとんど夕食を食べてしまった頃、中段のキャビンで寝ていたスクレがゆっくりと肘をついて半身を起こした。

「よう、調子はどうだ」

スクレはその言葉に腕をひらひらと振って見せた。けだるそうにゆっくりと体を動かし、移動式ステップで床へと降りてくる。

「さつきより視界が歪んでる気がするよ」
壁をつたい、手を借りて椅子に座ったスクレにアダムはこれもまた真空パックされた流動食を手渡す。

「ナクは？」

「そこで寝てるよ」

アダムは上段のキャビンを顎でしゃくる。

スクレは安堵と疲れが混じった短いため息を一つついた。

そして流動食の封を切り、口に少しずつ流し込む。

あまり食欲はないようで、たまに流動食の味にうんざりしたような表情をする。

「ところでさ、さつきから視線を感じるんだ」

スクレはイシュレに視線を移す。

イシュレはパック詰めされた夕食を口の前に両手で持ちながら、スクレを観察していた。

焦点が合わないスクレの眼に睨まれても、眼を大きく見開いたまま好機の混じった眼で見つめるのをやめない。

「言葉が解らないの？」

スクレはイシュレではなくアダムに聞く。

「話せるよ、普通に」

アダムは面倒くさそうに言う。

「じゃあこの人に言っちゃってよアダム、僕の何がそんなに面白いのかって」

「ほっとけスクレ、おかしな奴だ」

「失礼ね」

アダムの言葉にイシュレは少しむっとした顔になる。

「失礼なのはお前だろ」

今はもう自分の方を見ているイシュレに向かって、アダムは言う。
その言葉にイシュレは席をたった。

「別に面白くはないわ、ちよっと関心を持っただけよ」

そう言うといシュレはドアから休息室を出て行った。

「悪いな、アセチルまでもうすぐだ。それまで寝といてくれ」

「そうさせてもらうよ。お礼は元気になってからたっぷり言う事にする」

アダムはスクレがベットに再び横になれるよう手を貸し、それが終わるとアセチルへの着陸態勢を整える為に操縦室へと向かった。

アセチル

アセチル到着に先だつて、飛行は自動から手動に切り替えられた。手動切り替えは余裕をもつて、着陸五時間前から行われた。

アセチルは銀河屈指の工業国であり、人や物を乗せて運ぶ船が領有宇宙付近にひしめき合っているからである。

「船を直接病院につけよう。ツエネフ国立病院で受け入れが可能か問い合わせしてくれ」

メインパイロットをしているアダムが横にいるナロンにマイクを通して言う。

了解、そう言い病院の通信センターに問い合わせる。

「受け入れ可能、第七ゲートで待機してるそうだ」
ラジャー
「了解」

大気圏に突入した為か、気付けば周囲が明るくなってきた。

大気は特徴のある青緑色だ。

地上より遙か遠く、まだ雲の上だというのに、いくつもの色とりどりの誘導灯が宙に浮かんでいる。

船の中まで響いてくる轟音と共に、円錐型の超大型の船が目の前を斜めに横切る。

鈍い鉄色のそれは、貨物船だろうか。

フロントガラスからの景色では全体が想像出来ないほど巨大だ。

イシュレは初めて見る光景に度肝を抜かれているのか、透ける壁に手のひらと額をくっつけてフロントガラスの外の光景に見入っている。

「あぶねえな」

そう悪態をつくアダムは船を急旋回させる。

正規の誘導ルートから外れたのか、決められたルートに戻ってくだ
さい、と音声ガイダンスの機械的な女性の声がする。

「近道するぜ」

「安全飛行をたのむよ」

二人の背後からは急旋回にバランスを失ったイシュレのきゅっとい
う悲鳴が聞こえる。

白い綿雲を一瞬で突き抜け、見えてきたのは人間達の巢、巨大都市
だ。

どこまで見渡しても、アセチルがかつて土と岩と海だけだったところ
の面影はない。

建物は太古にアセチルの表面を覆いつくし、それが終わるとまだ飽
き足りない人間達は上へ上へと都市を成長させた。

人が無力である事を思い知らされる虚無の宇宙空間から帰ってきた
パイロット達は、まるで人間が惑星を征服したかのようなその光景
に、少なからず安堵を覚えるものだ。

それはアダムとナロンにしても同じ事だった。

上空の船の流れを取り締まるポリス・パイロットにつかまる事もな
く、船はツエネフ国立病院へと、人工建造物のジャングルをすり抜
けながら向かう。

ツエネフ国立病院は一目でそれと分かるような特徴的な外観をして
いた。

際立つて巨大な太い円筒状のその建物は、白いつるつるの表面をしている。

そばによると、その表面は日の光を反射して、控えめなプリズムのように照り輝く。

まっさらな表面にランダムに存在する僅かな窪みが搬入ゲートだ。船でゲートに接近していくと分かるのは、僅かな窪みは、船を停めるのに十分な広さを持つという事だ。

第七ゲートには数人構成された医療班と幫助ロボットが待機している。

打ち合わせ通りに事は進んでゆく。

医療班と幫助ロボットはスロープから船に入ってきて、ナクとスクレをストレッチャーに乗せる。

その間、アダム達にかかさず挨拶をしたり、適当な愛想を振きながら。

「治つたらすぐ連絡しろよ」

視界から消えるストレッチャーに向けた言葉に、幫助ロボットが曖昧なお辞儀を返す。

「ねえ、これからどこに行くの？」

まだ半透明の壁に張り付いたまま、イシユレが訪ねる。

アダム達の船は、他の船や、決められたルートを走る輸送ボール、緻密に入り組む建造物の隙間を縫うようにしてステーションへと向かう。

影から光の当たる場所へ、また影の中へを繰り返しているうちに、

壁、床、柱までもが透き通るステーションが見えてきた。

上部はドーム状で、様々な船や輸送ボールが発着している。

ドームを支えているくびれた基部も、やはり透き通っていて、そこには様々な形の主に中型以下の船が整然と格納されている。

「俺達の本拠地^{ベース}さ。一段落ついてお前を送ってやれるまで、客室^{ゲストルーム}で生活してもらう事になる。それでもいいか？」

「ええ、いいわ」

そういうイシユレは、いままで見た事のない新世界にまだときめきめいていた。

本拠地

ドームの中にはたくさんの太いパイプが通っていて、船はその中の一つを進んでいた。

パイプの中の決められた場所で船は停止し、そこで三人は降りる。

三人が降りると、船は再びゆっくりとパイプを進みだした。

パイプは船を格納庫へと導くはずだ。

三人は自動ドアからパイプの外に出る。

そこはまさしくドームの内部、メインホールであった。

幾枚もの透明な板が、太陽光を幾度となく屈折させ、乱反射させ、ホールをまぶしくない程に輝かせる。

イシュレは足元を見た。

はるか下にたくさんの人間の頭が見える。

それと分かるぎりぎりの大きさで。

透き通る床に宙に浮いているような気持ちにさせられるが、足元から伝わる、きゅっきゅつという確かな感触が、浮遊感をいくら和らげる。

ごったがえすという程ではないが、ステーションにはたくさんの人がいた。

様々な肌の色、髪の色、服の色。

多くの人が光沢のある生地を着ている。

イシュレのように、布を巻きつけた服装の人はそうはいない。

そのせいだろうか、通りすぎる人がちらちらと視線を投げかけるようにするのは。

イシュレはそれを気にするように黒い布で半分顔を隠した。

ホールの中央の豪勢な噴水のまわりに備え付けられているベンチに

座って十分、迎えが来たようだ。

床の深い溝にそって滑るように進んでくる一隻の運搬船^{カプセル}に三人は近づいてゆく。

カプセルは三人の丁度手前で静止し、運搬船^{カプセル}のカバーが大きく開かれる。

「おかえりなさいませ」

運転手が形式的な言葉を口にする。

三人が手際よくその船に乗り込み、カバーが閉じられた刹那、運搬^{カプセル}船は滑らかに動き出した。

ステーションからきつかり三分運搬船^{カプセル}は本拠地^{ベース}に到着した。

アダム達にとつて馴染みの場所である本拠地^{ベース}は、いくつもの巨大な円盤^{ディスク}を積み上げたような形をしていた。

円盤の間にはきつちりと等感覚な隙間があるが、もちろんそれは風通しの為ではないだろう。

円盤^{ディスク}は上のものほど小さくなっている。

その巨大な金属の塊に、イシュレはなぜか不吉なものを感じた。

でも・・・一番上の円盤^{ディスク}からの眺めはなかなかよさそうね、イシュレはそう考える事で不吉な予感を追い払った。

本拠地^{ベース}は何重もの警備で固められていた。

アダムとナロンは軽い生態認証ですまされたが、イシュレは二人の何倍もの認証に加え、生体の様々なデータを記録される。

テストロンでの脱獄がデータネットに開示されていたら問題になるところだが、その情報は開示されていないようで、イシュレはようやく検問から開放された。

本拠地^{ベース}に入ってから黒い制服に身を包んだ男の姿ばかりだったが、わりと小さなフロントにはきちんと髪を結わえた若い女性が二人立っている。

水の流れを利用したアートが壁一面のほどこされているその場所で、イシユレは部屋の鍵となるコードを渡される。

ゲストルームと本拠地^{ベース}の住人達の部屋は異なるフロアにあり、それぞれの場所に行く方法も異なる為、アダム達とイシユレはそこで別れる事となる。

「何かあったらフロントに言え。無料^{ただ}で食べれる所もここの中にあるから。俺らへの連絡もフロントを通せ。二三日中に、暇を見つけてミスカバルに送ってやるよ」

「分かったわ。ありがとう」

イシユレはアダム達が疲れた足取りで通路の中に消えていくまでその後姿を見送った。

イシユレは床で等間隔に点滅するガイドライトに導かれ、ゲストルームに辿りついた。

コードを言つと、薄い刃のようなドアが開く。

中はいたって普通の造りだが、あるべき物があるべき場所に収まっているし、小さいながら窓もついている。

プッシュオープン型のキャビネットには、アセチルで一般的なデザインのセットアップが入っていた。

イシユレはそれをつまんで目の前に掲げてみた。

グレーのその服は、イシユレの体にぴったりと合いそうだ。

白が貴重^{貴重}のその部屋の、中央に置かれたベットに座してみると、冷たいそれはゆったりと体にあわせて沈みこむ。

丁度座った目線の先に、ただ丸い大きな鏡があった。
イシュレはそれを見た。

一年前より少し大人びた顔。

でもそれは16才にしては幼い。

すみれ色の目には、疲れと、緊張と、さみしさが浮かんでいる。

しかし今イシュレの心を圧倒的に支配していたのは、さみしさだった。

突然一人になった時に姿を現す静寂。

それは心地好い事もあるが、時には心を押しつぶさんとする大きな見えない波のように遅い来る。

その波に、イシュレはテストロンで幾度押しつぶされそうになったことか。

どうしたらいいか分からない、その感情は近頃、親友と呼べるほど良くイシュレの側にいた。

イシュレは窓の外を見た。

私は今、自由なのね

その響きは思いのほか素敵だった。

物心がついた時から育った家には、一つも窓がついてなかった。

もちろんテストロンの監獄にもだ。

ゲストルームは下の方のフロアのようだ。

窓の外の景色が船のフロントガラスから見えたような絶景ではないのが残念だ。

自由、自由。そうイシュレは心の中で唱えてみる。

それでも気分はあまり晴れない。

規則正しく縦列して宙を移動する船や輸送ボールを見てみると、ふとアダムの顔が浮かんだ。

ほっとけ、変なやつだ

そう言ったときのあきれたアダムの表情を思い出す。

フロントに言え、フロントを通せ

そう事務的に言い放つアダムを思い出す。

「後三日の付き合いにしても、少しくらい仲良くしてくれてもいいじゃない」

窓ガラスに額をくっつけたまま、オレンジに色づいてきた夕日を睨みつけながら呟いた。

夕食の誘い

十分後、イシュレはフロントのある小さな広間にいた。

灰色のセットアップに着替えて。

つやつやとした光沢を持つそれは、着ると驚くほど軽く、まるでオーダーメイドであるかのよに体になじんだ。

やわらかな黒い髪を撫で付けてみたものの、その成果はあまりない。癖毛というものはそういうものだ。

フロントにはこういつつもりだった。無料でご飯が食べれる場所を教えて下さいと。

しかし実際口をついたのは別の言葉だ。

「アダムの部屋を教えて下さい」

その響きに急に恥ずかしくなって目を伏せる。

そんなイシュレに、グレーの髪をつやつやと結い上げた若いフロント係が好奇の視線を投げかけた気がした。

「ガイドライトにそってお進みください、アダムさんの部屋へご案内致します」

フロントからアダムの部屋までは大分遠かった。

アダムはフロントからの連絡をうけていたようで、イシュレが部屋の前に着くと、ドアは中から開けられた。

「入ってもいいかしら」

「その為に来たんだろ？」

アダムは壁と一体化したパネルに向き直ったまま言う。

イシュレが部屋に入っていくと、アダムは腕を一振りしてパネルの内容を消した。

アダムの部屋は茶色を基調としていて、広さ、窓の大きさ、窓からの景色など様々な点でイシュレの部屋を上回っている。

「なんだ？」

アダムは側の椅子に腰を下ろして言った。

その顔は、特にどんな感情も映し出していない。
イシュレもベットの隅に腰掛けた。

「用事がなかったら来てはいけないの？」

「そりゃな、後で面白おかしく言われるんだよ、フロントのお姉さま方に」

帰れと言ってるんだろうか、イシュレは思った。

「お前いくつだ？」

「16よ」

アダムは一瞬疑わしそうな目をしたが、信じる事にしたようだ。

「だったら分かるよな、女が一人で男の部屋に来る意味を」

その言葉に、イシュレは座っていたベットを立ち上がった。

しかし向かった先はドアではなく、窓の方だ。

夕日が沈んだ後の紫に飲み込まれた町は、自分達を鮮やかにライトアップする事で眠る事を強烈に拒否している。

「つまりおいしい晩御飯をおごってほしいって意味でしょ」

「」名答」

一瞬の沈黙の後に微笑みそう言うアダムを振り向いて、イシュレは怒ったような勝ち誇ったような顔をする。

アダムはイシュレにあわせてほんの少しいつもよりゆっくり歩き、それを敏感に感じとったイシュレをいい気分にさせた。

小型の運搬船（カプセル）から見える夜景は、イシュレを有頂天に

させた。

しかしそんなイシュレの気を知らず、船は下へ下へと高度を下げてゆく。

アセチルでは日当たりがよく景色が良い、高度が高い場所ほど価値が高い。

つまりアダムはお金をかけるつもりはない、そういう事だ。

二人が入ったのは質より量が勝負の料理と、旨いのに高くない酒が自慢、そんな店だ。

アダムは通い慣れているようで、ライトがちらつくカウンターでせつせと何かこしらえているマスターに見つかるなり声を掛けられる。

「よう久しぶりだな、誰だいそのかわいいお嬢ちゃんは」

「テストロンでの戦利品さ、酒の味を教えてやるんだ」

店内は人であふれている。

肉体労働者が多く、つまり会話の声の大きさなど気にしない人間が大半であり、店内は非常に騒がしかった。

少し強張っているイシュレの表情を見て、アダムは店の一番奥のわりと静かな一角に進んだ。

イシュレがメニューを見ても何も分からなかったので、注文はすべてアダムがする。

注文して程なく、巨大なグラスになみなみと注がれた酒が到着する。それを一口飲んだアダムの顔が、人間らしくていきいきとした表情にぱっと変わる。

その単純さに驚きつつ、イシュレもそれを口にする。

確かにそれはおいしいが、テストロンで飲んだ“希望の満ちるジュース”ほどではなかった。

夕食

料理も次々と運ばれてくる。

白くてぱさぱさした肉、白い筋の通った鮮やかな赤色のベビーリーフ、何にしても船の中での宇宙食の後に食べれば、ごちそうに感じる。

柄付きのステーキでそれを突き刺し、二人は思い思いに好きなものを口にはこんでゆく。

イシュレは騒がしい店内と、目の前のアダムを観察した。

店内にはもつと奥の部屋があるようで、目立たない扉が一つある。アダムといえば、イシュレには何も関心がないようだ。

テーブルに片肘をつく体制で、食べるのをやめないまま、店内を気にしている。

イシュレもつられて店内を見回した。

くすんだ色のライトが、何かの動物の丸焼の不気味なシルエットを浮かびあがらせる。

きよろきよろしていると、ヴィヴィットなピンクの目の色をした、あばずれと呼ぶのがよさそうな女に睨まれ、視線を下げる。

視線を下げた先の床に、円形の、足がたくさんついた虫を発見し、イシュレはついに溜息をついた。

その時、入口の方で、騒がしい店内でもはつきりと際立つ、何かが破裂したような音がした。

その後に、男達の派手な笑い声。

一瞬僅かに店内の雑音のボリュームが下がったが、店内はまたすぐ元の騒がしさに戻る。

しかし店のオーナーが入口の集団に近付いて行き、空気の振動が伝

わってくるようなどすのきいた声で集団を怒鳴りつけた時、店内はほんの一瞬だけ静寂に包まれた。

「そうゆう事は奥でやってくれ」

戻りつつある騒音の中、イシュレはオーナーがそう言うのが聞き取れた。

暫くして、恰幅のいい三人の男達が、しぶしぶ、といった足取りで入口の方から奥に向かって歩いてきた。

三人の第一印象をいふなれば、“最悪”だ。

一番体の大きい男は、妙にリアルな角をはやしているし、半裸の男の皮膚は布をつぎはぎしたようにあちこちで質感が異なっている。そして最悪な事に、アダムがその集団に挨拶するかのようになれなれしく片手を上げた。

さらに最悪な事に、その集団はアダムと知り合いのようで、こちらに向かってやってきた。

店の客が好奇の視線を投げかけてるのも気にせず、集団はイシュレの知らない言葉で、大声でアダムに話しかける。

大きな、まな板の様なような手でアダムの背中をどんと叩くと、集団とアダムは笑い出した。

席を立とうとするアダムに、イシュレは信じられないという視線を向ける。

その視線に気付いてか気付かないでか、アダムはイシュレの方を振り向き、手のひらほどの大きさの三角のカードを取り出す。

「食い終わったら、これでエア・カーを呼べ、何か分かんねえ事あったらオーナーに聞けよ」

その瞬間、イシュレは、食べかけの肉と共に放置されるという現実を突き付けられた。

アダムと集団は奥の部屋に続く扉に向かって歩きだす。
イシュレは不愉快な気分のまま、アダムの後ろ姿を睨むようにじっと見た。

しかしアダムの代わりに振り向いた角男が片目をつむって見せたので、さらに気分が悪くなったただけだった。

アダムはいつてしまった。

もう帰ろうかしら、そう心の中で悪態をつきながら、イシュレは目の前にほうり出された、三角のカードに目をやった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8769m/>

片腕の王女

2011年10月7日16時12分発行